

本居神道

(1) 本居宣長

1) プロフィール

1730年伊勢国松阪に生まれる。松阪で医者を開業するかたわら、我が国の古典文学を研究し、1763年33歳のとき当時の国学の第一人者賀茂真淵に入門する。1801年72歳で死亡。

1764年35歳のとき、古事記の研究に着手し、35年の歳月をかけて69歳で全44巻の「古事記伝」を完成させる。これが宣長の最大の功績で、それまで存在こそ知られてはいても、難解な万葉仮名が使われていたため、その内容が十分に把握し切れなかった古事記の全貌が宣長によって初めて明らかとなった。

宣長のもう一つの功績は源氏物語を始めとする古典文学の研究で、「源氏物語玉の小櫛」の中で、人間のありのままの素直な情感を「もののあわれ」と名づけ、このもののあわれを表現することこそが文学の生命だと説いている。



本居宣長

しきしまのやまと心を人とはば朝日ににほふ山桜花

2) 国学

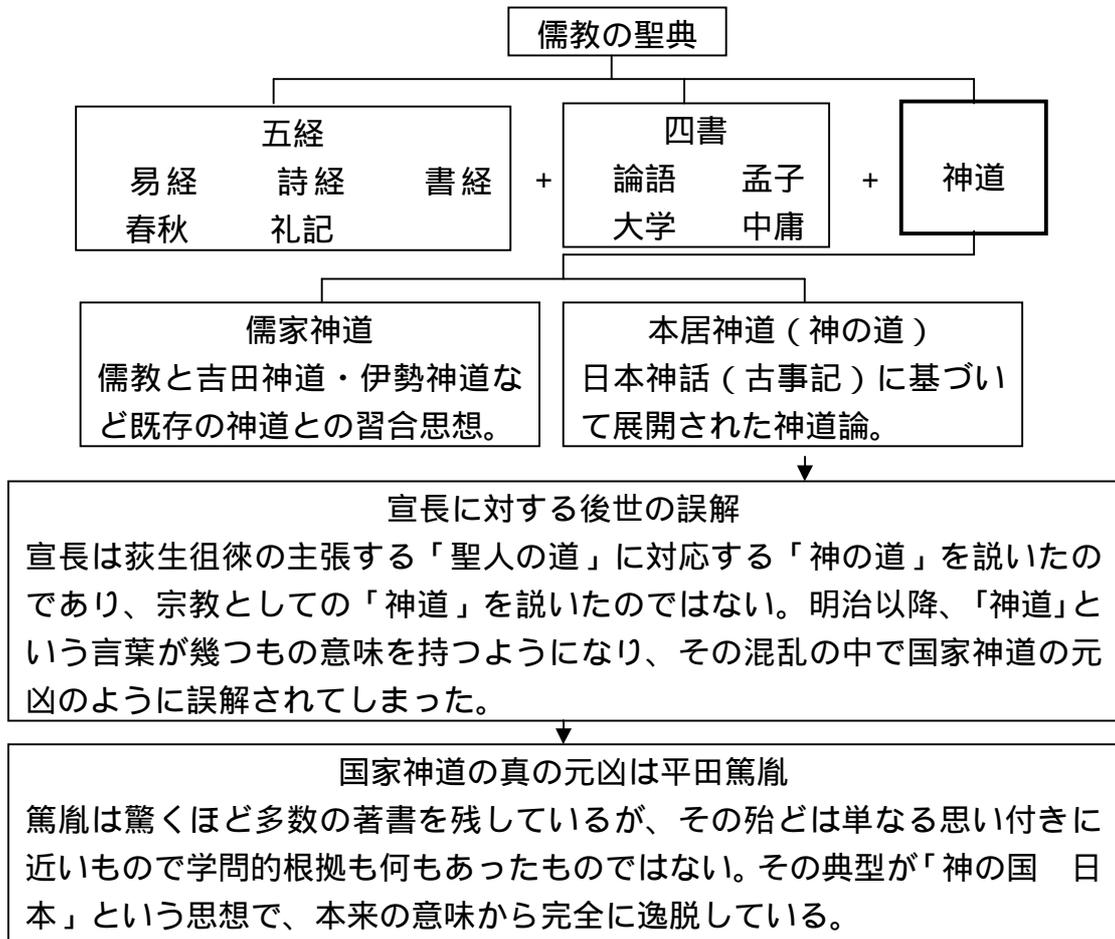
江戸時代中期に勃興した学問で、蘭学と並び江戸時代を代表する学問。それまでの「四書五経」をはじめとする儒教の古典や仏典の研究を中心とする学問傾向を批判し、日本独自の文化・思想、精神世界を日本の古典や古代史のなかに見出していこうとする学問。

国学は契沖の万葉集研究に始まり、続いて伏見稻荷の神官、荷田春満が神道や古典から古き日本の姿を追求しようとする「古道論」を唱えた。この契沖・春満の国学を体系化して学問として完成させたのが賀茂真淵。真淵は儒教的な考えを否定して万葉集に古い時代の日本人の精神が含まれていると考えその研究に生涯を捧げた。

その後、国学は本居宣長から平田篤胤に引き継がれ、篤胤は宣長の「古道論」を新たな神道である「復古神道」へと発展させ、後の尊皇攘夷思想に影響を与えた。また、日本固有の文化を求めるため、日本の優越性を主張する国粹主義や皇国史観にも影響を与えた。そして、近代以降は日本文学研究や国語学、民俗学の基礎となった。

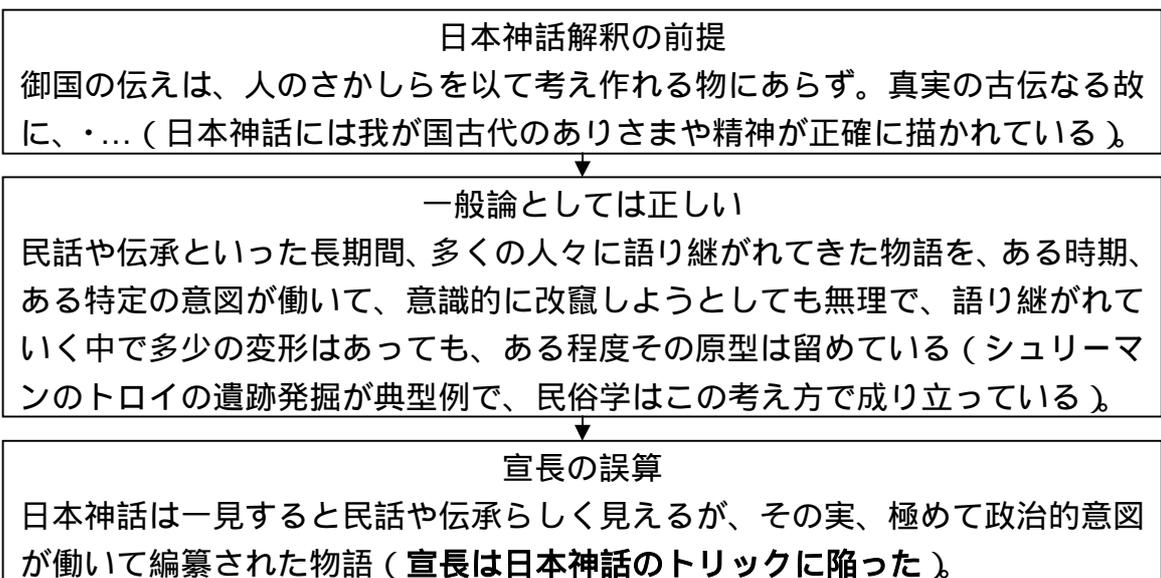
荷田春満・賀茂真淵・本居宣長・平田篤胤を国学の四大人(うし)と呼ぶ。

3) 本居神道の位置づけ



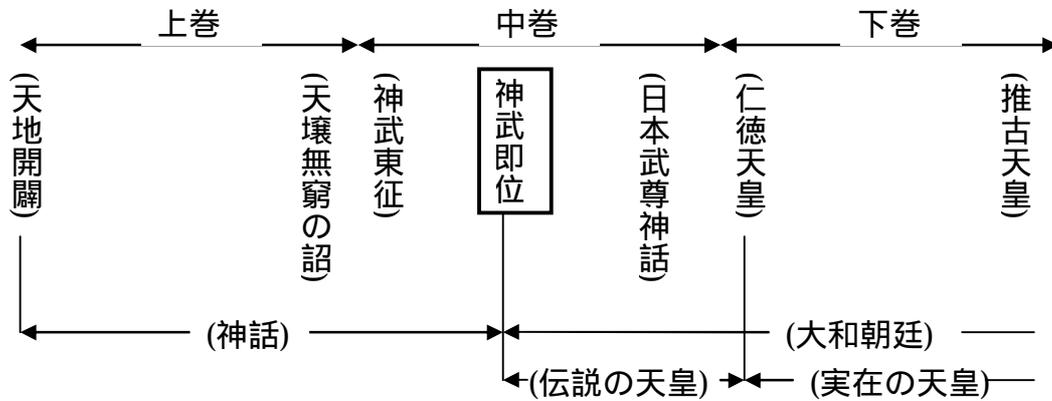
(2) 宣長批判

1) 日本神話のトリック



(日本神話のトリック)

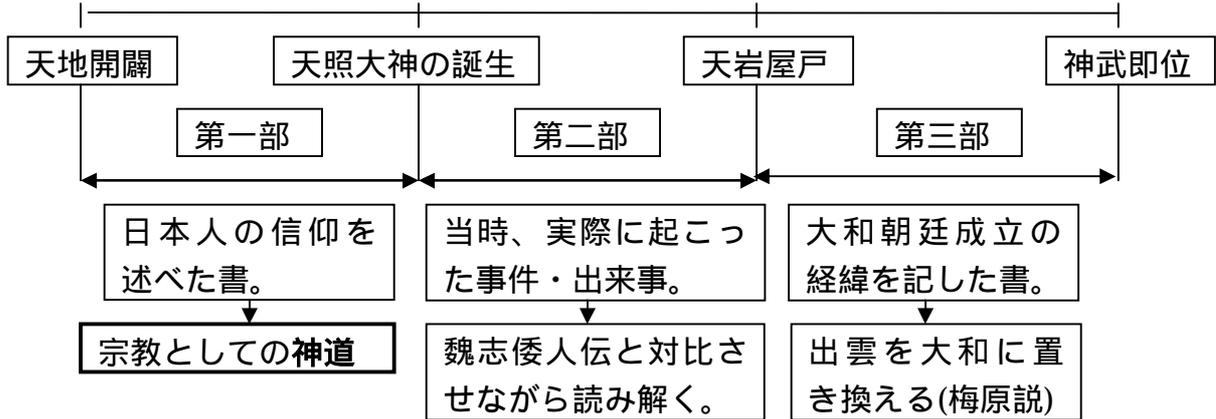
(古事記の構成)



古事記全体のメインテーマは「神武即位」。つまり、神武即位までが実際には神話で、とすると「天壤無窮の詔」は神武即位に至る1通過点に過ぎなくなる。ところが、宣長は上巻を「日本神話」としたために、「天壤無窮の詔」が「日本神話」の結論となってしまった。

宣長は上巻を日本神話と規定したために神道を誤って捉えた
此道はしも、可畏きや高御産巢日神の御霊によりて、神祖伊邪那岐大神伊邪那美大神の始めたまひて、天照大神の受けたまひたもちたまひ、伝へ賜ふ道なり。故是以神の道とは申すぞかし(天壤無窮の詔)。

神武即位までを日本神話と規定すれば、どのような解釈になるか？



(参考)

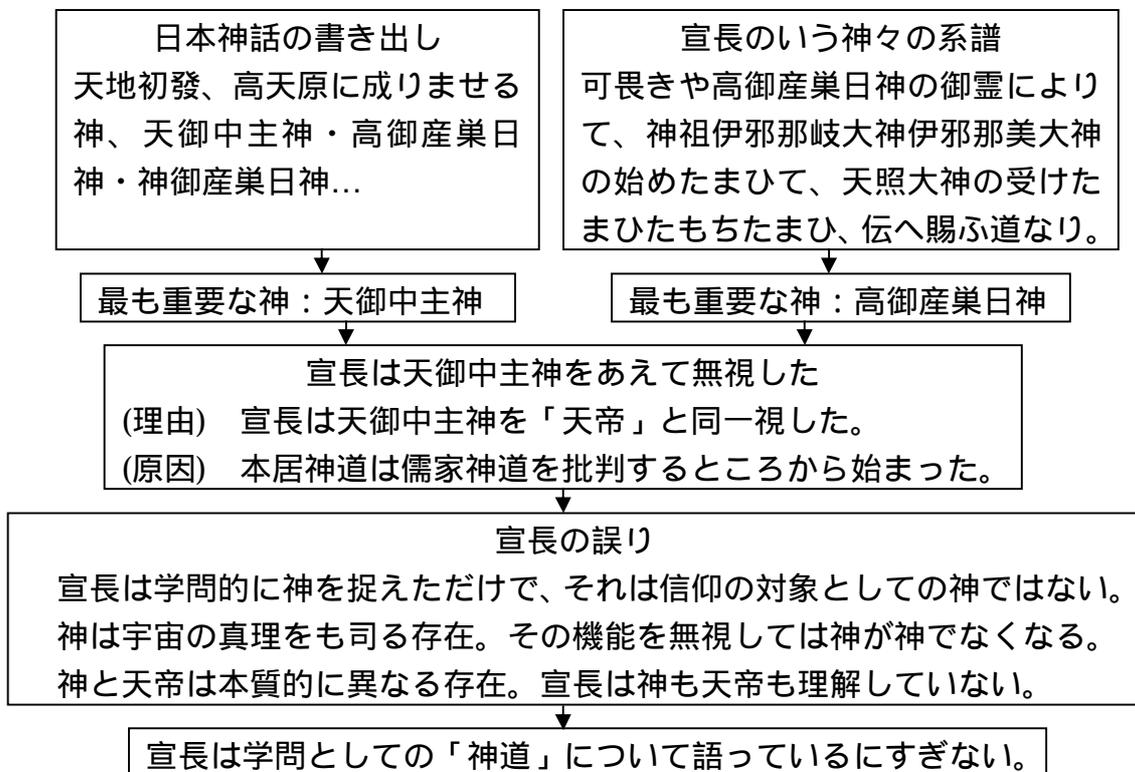
王朝交代説(鳥越憲三郎)

- 初代天皇 ; 神武天皇 (神武王朝)
- 10代天皇 : 崇神天皇 (崇神王朝)
- 15代天皇 : 応神天皇 (応神王朝)

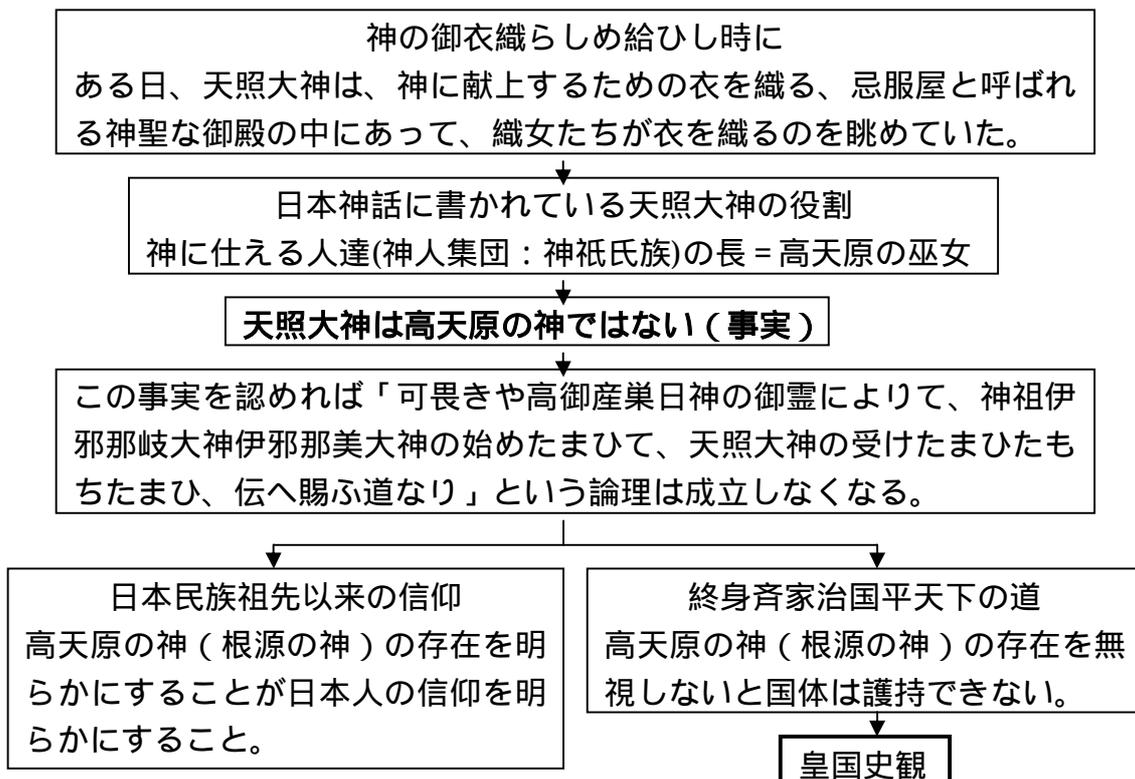
名前に「神」の付く天皇は王朝の初代帝王。現天皇家は応神王朝の末裔。

2) 事実の歪曲

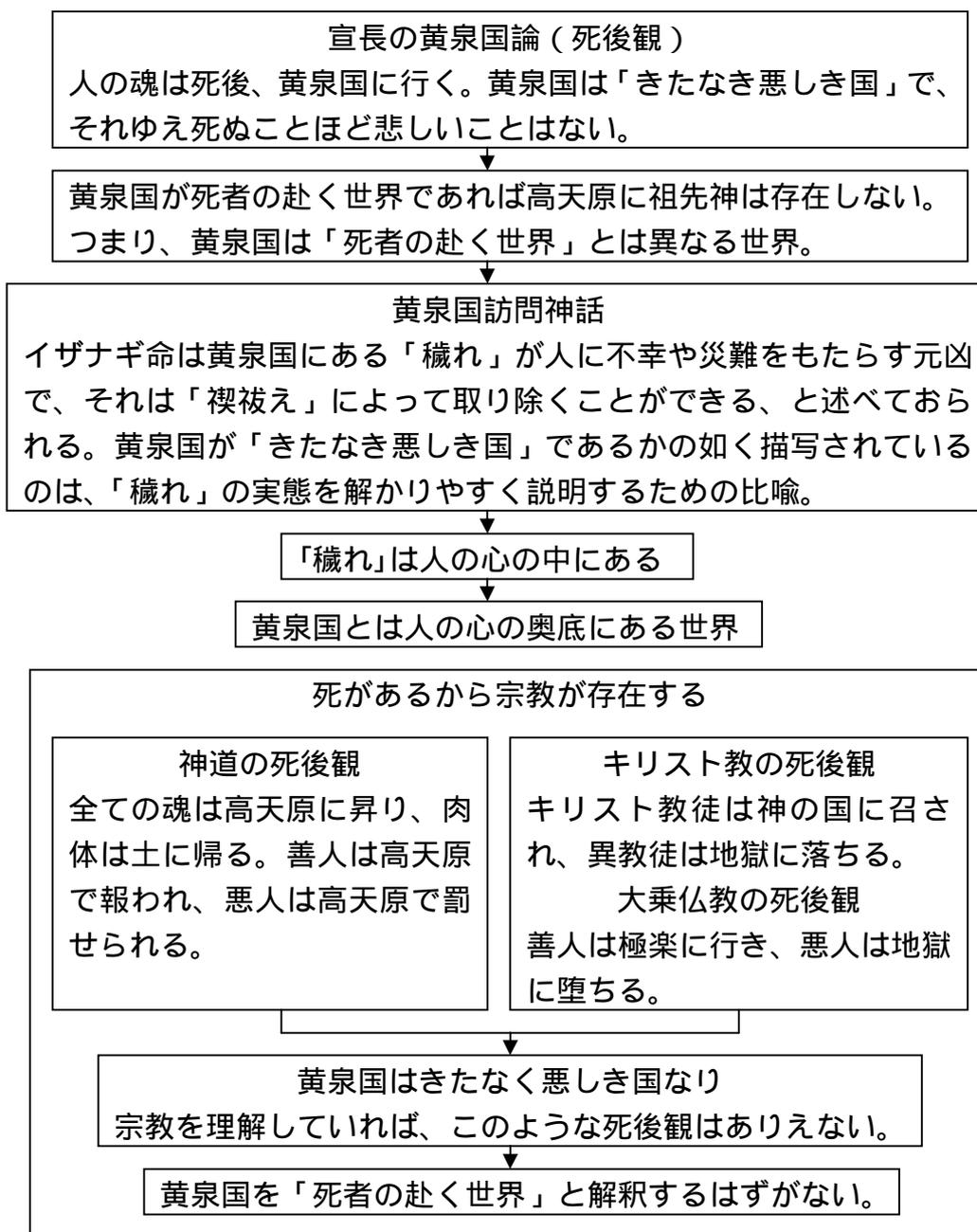
天御中主神



天照大神の神格



3) 宗教に対する無理解



(3) 宣長の神道論

1) 日本神話の絶対的尊信

日本神話に書かれていることは全て正しい
おのが説をとがむるならば、まず古事記・書記をとがむべし。此の御典どもを信ぜんかぎりは、おのが説をとがむることえじ（玉勝間）

理由(1)

御国の伝え（神道）は、人のさかしらを以て考え作れる物（儒教・仏教）にあらず。真実の古伝なる故に、和漢古今の事を以て、引当て考ふるに、符を合わせたるが如くにて、いささかも違える事なければ、世中の万の事は、善悪の神有りて、その御所為(みしわざ)なること、いささかも疑ひなし。善人は福(さか)え悪人は禍(まが)るは、これ善神の御しわざ、又悪人も福え善人も禍ることあるは、これ悪神のしわざにて、かくのごとく、御国の伝へは、善神と悪神とある故に、世人の禍福の事、道理のままにはあらざるも、...・(省略) ...・漢国の天命の説は、聖人のさかしら心にて、道理を以て、此方より作り設けたる物故に、道理はよくあたりて聞ゆれども、世中のこと、其説のままにはえあらず。

世の中のことは天命説では説明し切れないのが現実で、むしろ日本神話のいうように善神・悪神がその原因と考えた方が実態に合っている。

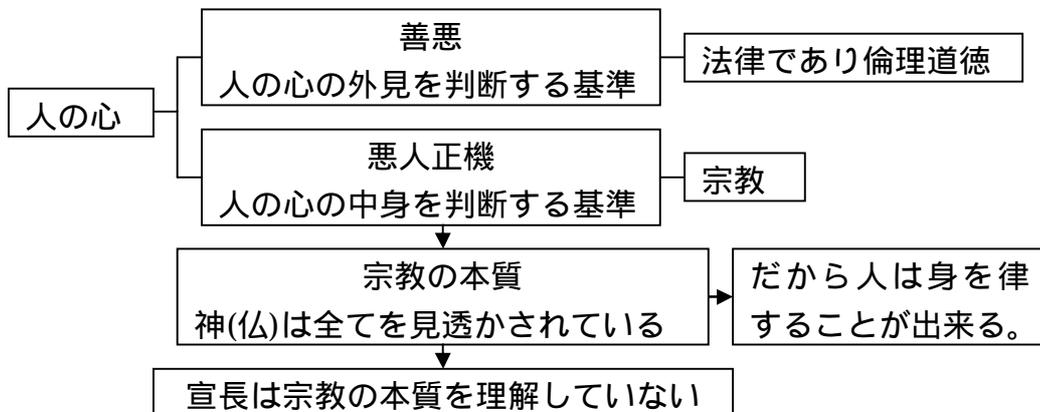
悪人正機説（親鸞）

善人なおもて往生す、いわんや悪人をや

自分の思い通りになることが「福」、そうならないことが「禍」ではなく、人の考える基準と異なる基準で神は「人の禍福」を考えておられる。

宣長の言っていることは、単に倫理道德上の優劣を競っているだけで、それは「修身齐家治国平天下の道」として「神道」「儒教」どちらが優れているかを論じているに過ぎない。

ところが、善神・悪神などという言葉を使っているため、多くの人は宣長が宗教について論じているが如く勘違いした。



理由()

本朝の皇統は、すなわち此の世を照らしまします、天照大神の御末にましまして、かの天壤無窮の神勅の如く、万々歳の末の代までも、動かしたまふことなく、天地のあらんかぎり伝わらせ玉ふ御事、まづ道の大本なる此の一事、かくのごとく、かの神勅のしるし有りて、現に違はせ給はわざるを以て、神代の古伝説の、虚偽ならざることをも知るべく、異国のおよぶところにあらざることをもしるべく…

「天壤無窮の詔」によって天皇位が代々受け継がれていることが何よりの証拠であり、日本神話の記述が正しいかどうかという百の議論より、この一つの真実の方が重い。

天皇がある種の神的権威を有しておられることは確か。しかし、それが天照大神の権威に由来しているのであれば、奈良時代から明治維新に至るまでの歴代天皇の多くが仏教徒という事実とは矛盾する。

坊さん(法皇)の権威の源泉が神様というのもおかしな話



この一例を以ってして、日本神話の記述が全て正しいといふのはいかにも強引といわざるを得ない。

2) 神観念

神観念(1)

此天地も諸神も万物も皆ことごとく基本は、高御産霊神・神御産霊神と申す二神の、産霊のみたまと申す物によりて、成出来たる物にして、世々に人類の生れ出、万物万事の成出るも、みな此御霊にあらずということなし。されば神代のはじめに、伊邪那岐・伊邪那美二柱の大神の、国土万物もろもろの神たちを生成し給へるも、基本は皆かの二柱の産霊の御霊によれるものなり。

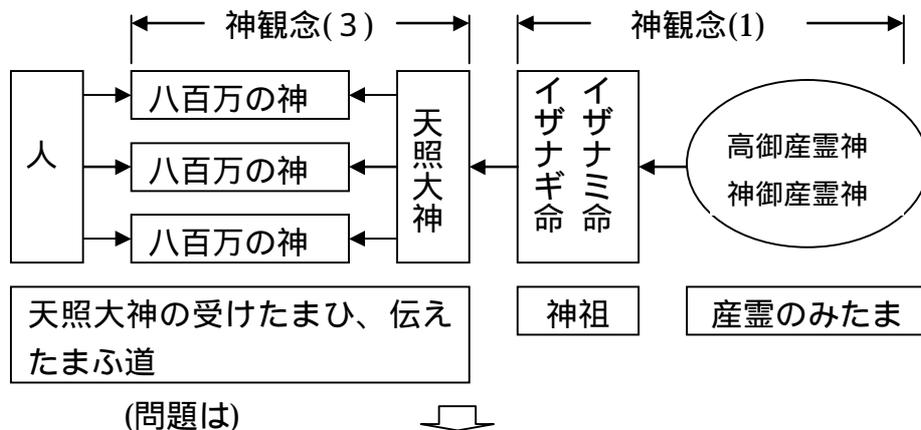
神観念(2)

さて凡て迦微とは古御典等に見えたる天地の諸々の神たちを始めて、其を祭れる社に坐す御霊をも申し、又人はさらにも云わず、鳥獸木草のたぐひ海山など其余何にまれ、尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏きものを迦微とはいうなり。

神観念(3)

神は聖人とは又大に異なる物にて、甚奇く靈しく巫しまして人の智のはかり知ることあたわざる所おほく、又善も悪も有りて、その徳もしわざも、又勝れたるもあり、劣れるも有り、さまざまにて、さらに一準に定めがたきものなり、かの仙人天狗狐などの類も、神の片端にてはあれ共、いと微しく劣れる神にこそあれ。

(宣長の神観念)



神観念(2)
 さて凡て迦微とは古御典等にみえたる天地の諸々の神たちを始めて、其を祭れる社に坐す御霊をも申し、又人はさらにも云わず、鳥獸木草のたぐひ海山など其余何にまれ、尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏きものを迦微とはいうなり。

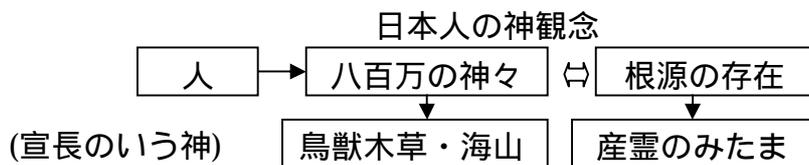
宣長は古典にあらわれたカミの付くものを拾い出し、その最大公約数的な特徴を言葉で捉えた。これが神観念(2)。

この定義はたいへん有名で、二百年たった現在でも、これに勝るものはないといわれている。

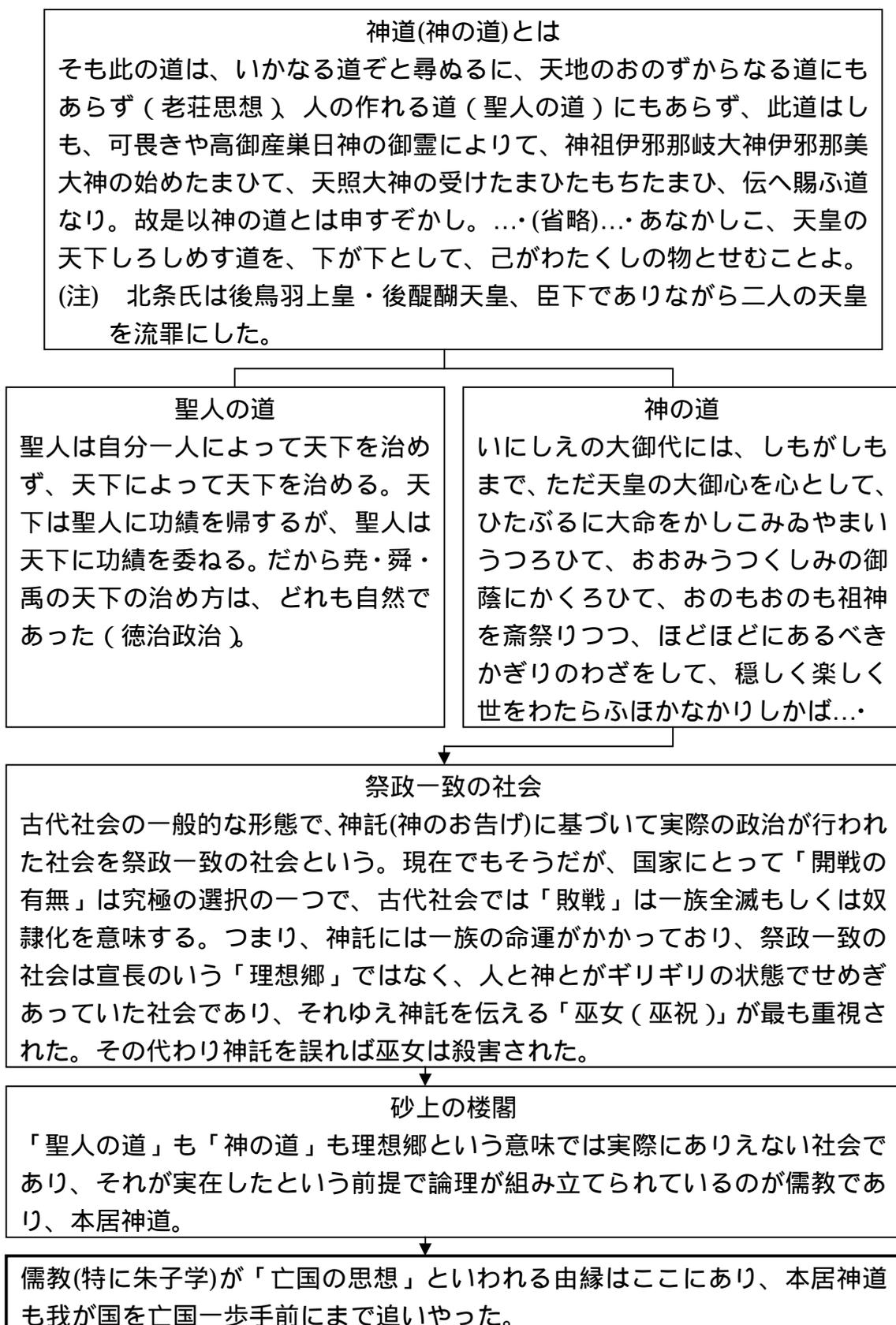
学問的には正しいのかもしれないが、それをそのまま受け入れれば、とても神を祭る気にはならない。

この定義の何処がおかしいのか？
 「天地の諸々の神たち」の中には天御中主神・高御産霊神・神御産霊神・伊邪那岐大神・伊邪那美大神、それ以外の神々も含まれており、この定義では高御産霊神・神御産霊神と仙人・天狗・狐が、レベルが異なるだけで、同列の神として扱われている。つまり、天御中主神・高御産霊神・神御産霊神・伊邪那岐大神・伊邪那美大神とそれ以外の神々とを分けなければいけない。

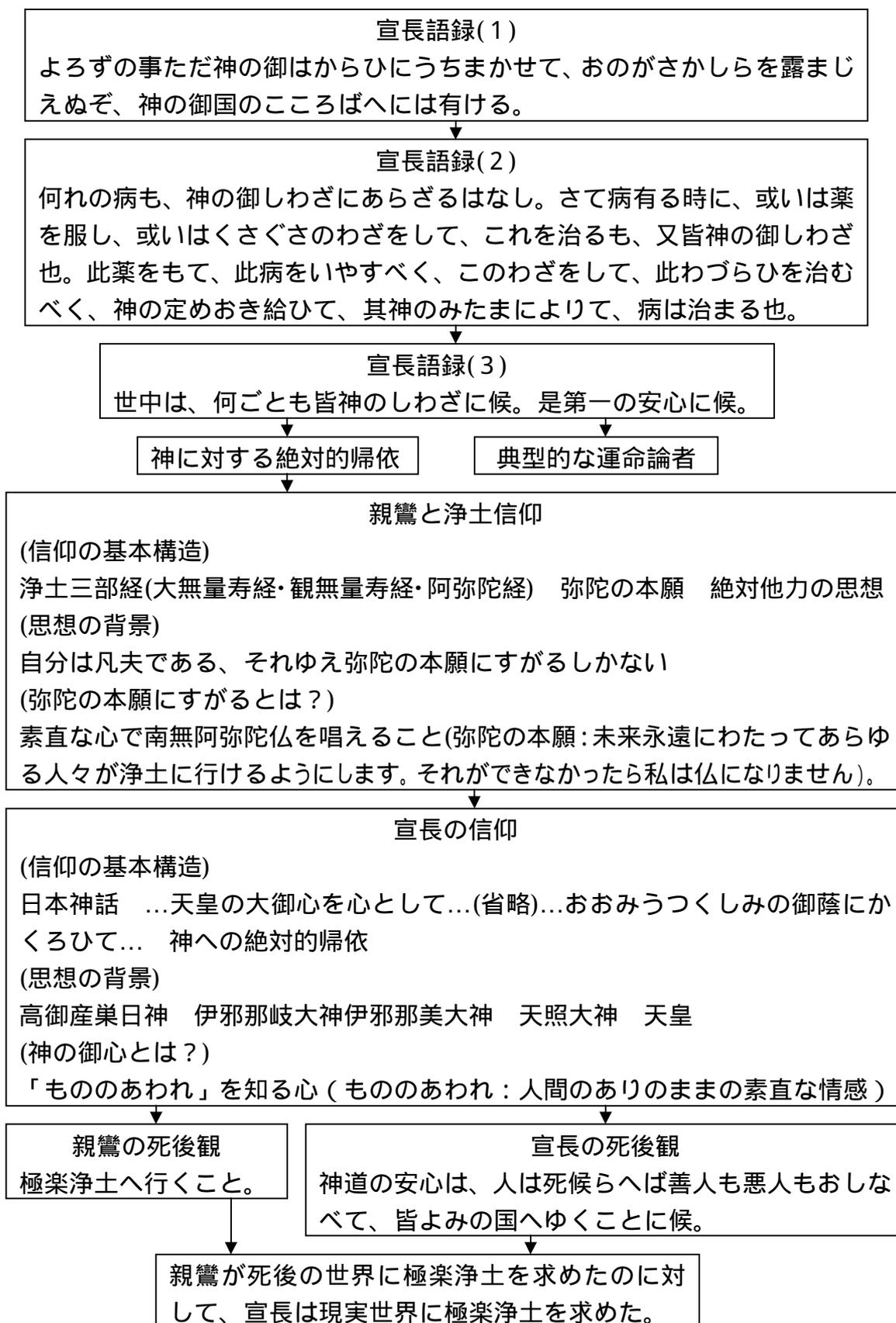
なぜ日本人は「鳥獸木草のたぐひ海山」を神と見なしたか？
 全ての「鳥獸木草のたぐひ海山」を神と見なしたのではなく、背後に神の存在が認められたものだけを神とみなした。宣長流にいうとその神こそが高御産霊神・神御産霊神に他ならない。悪神・仙人・天狗・狐も同様。つまり、宣長は日本人が神をどのように捉えていたか、その構造を理解していなかった。



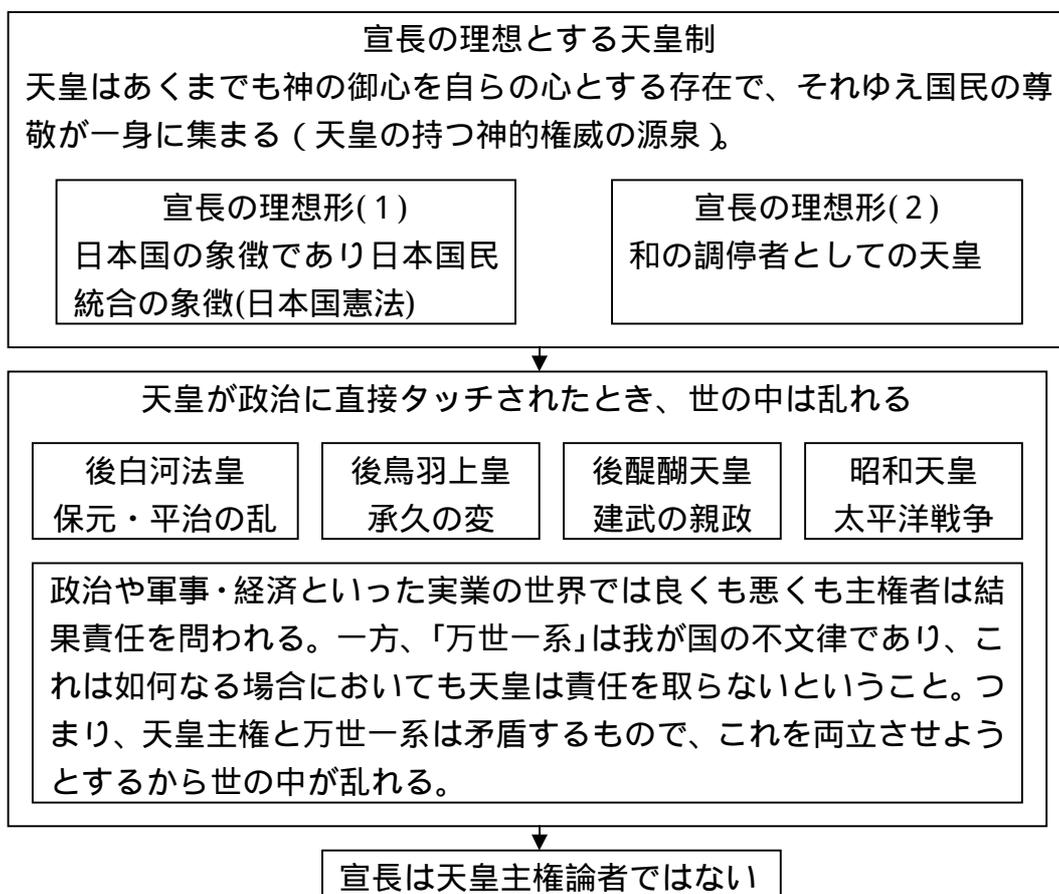
3) 神道論



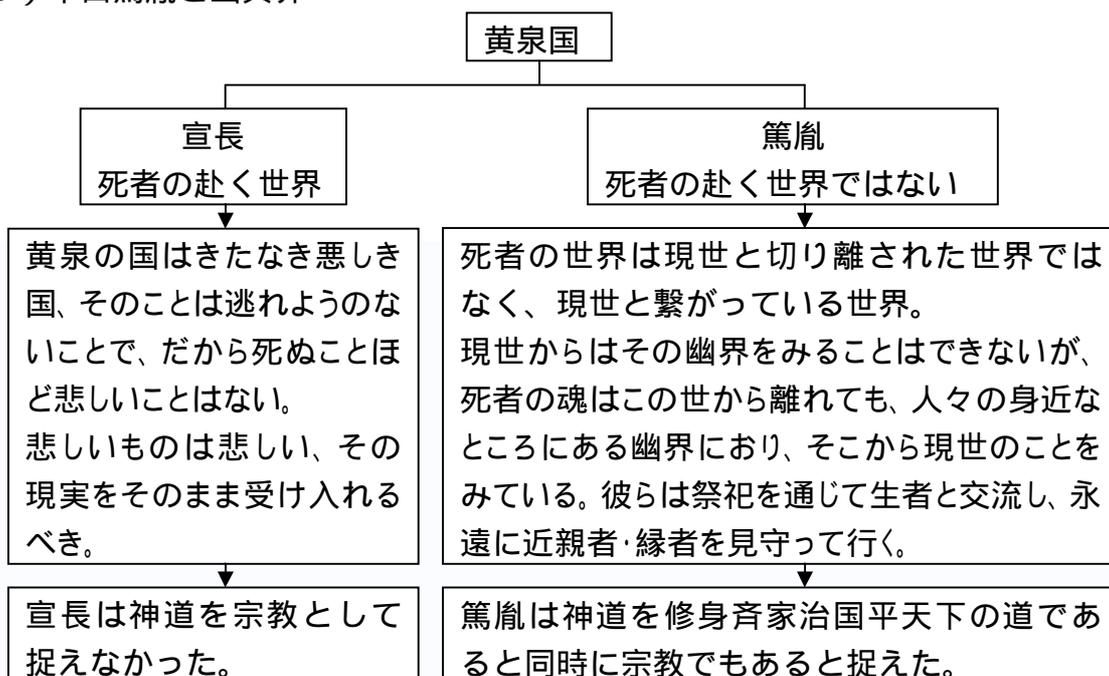
4) 宣長の信仰

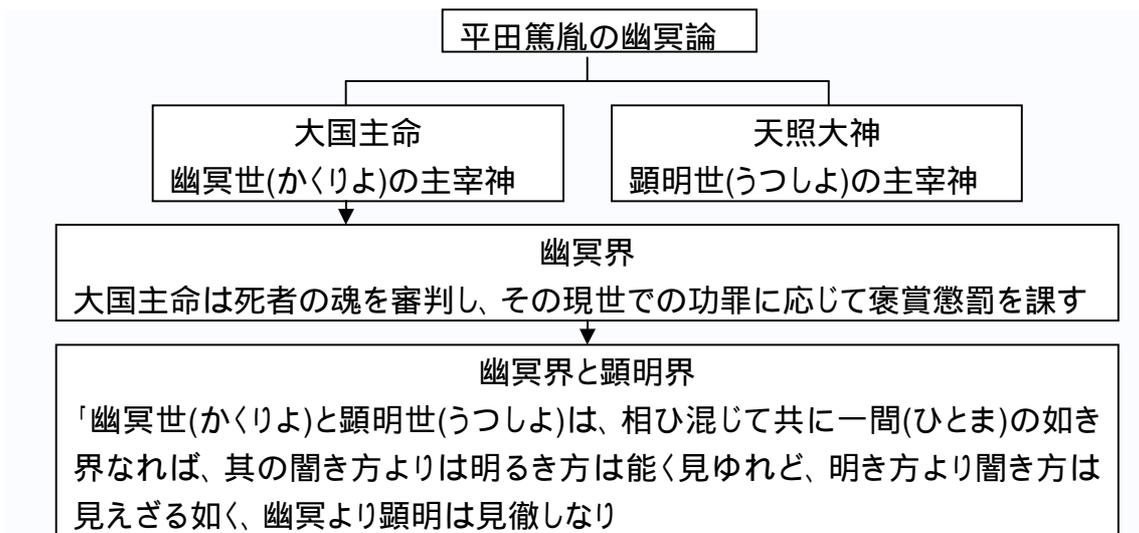


5) 宣長と天皇制



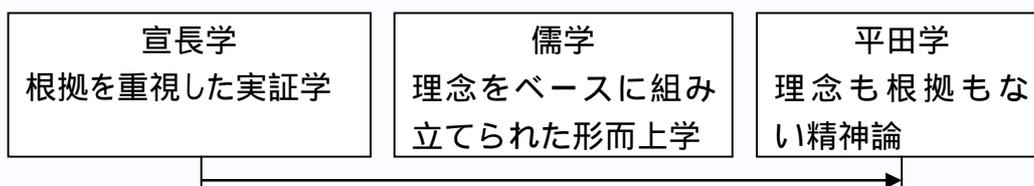
6) 平田篤胤と幽冥界





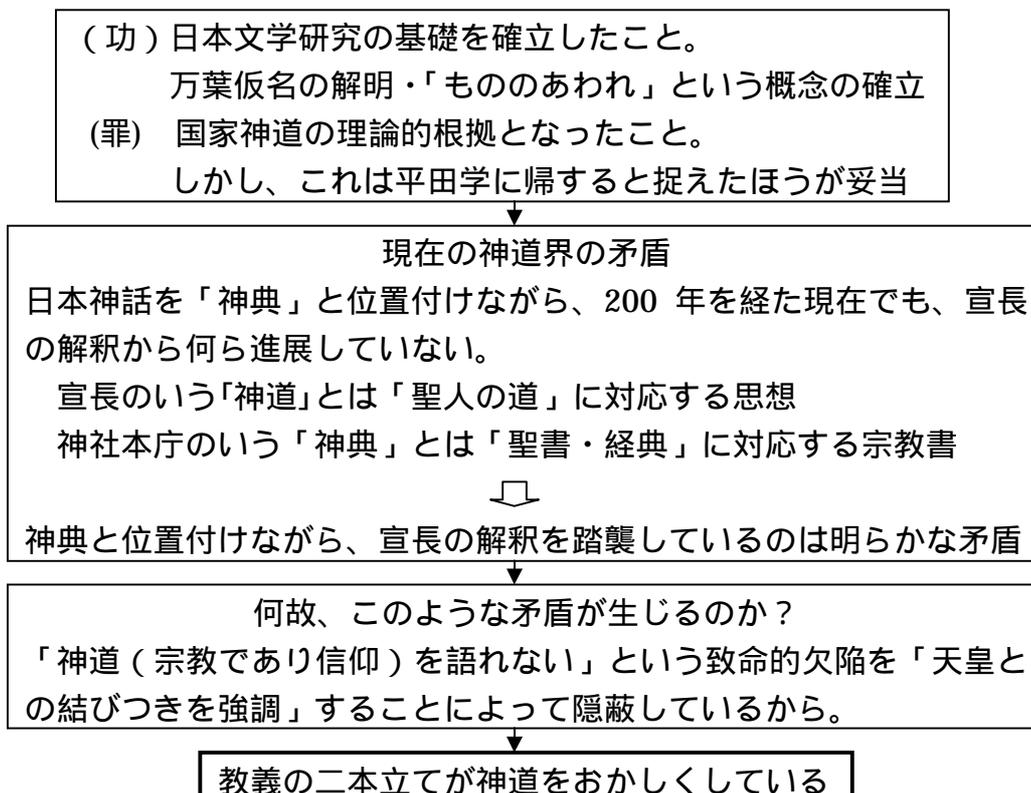
(4)まとめ

1)宣長学と平田学



(神道が学問の範疇を超えて精神論へと変化していった)

2) 宣長学の功罪



神道講座テキスト (第10回)

平成18年12月3日(日)

新熊野神社